遣唐大使　道真

◉

千津敬紀

最後の言葉

「今日は、誕生日か」

ぽつんと誰に言うこともなく、つぶやいた。

庭には、萩の花が、咲いている。それが、道真にとって、大層つつましやかに思われた。色が鮮やかでない。よく見ても、何色なのか判別しにくい。

道真は、京の邸宅にあった、梅を思い出した。

（あの梅は、本当に赤かった）

あの邸宅は、取り壊されたと誰から直接聞いたでもないが、そのようなことが伝わってきた。

（あの梅の木は、どうなってしまったのであろうか）

京の邸宅には、萩がなかったことを思い浮かべていた。

（萩でもよかったのだ）

そこへ、給仕の女が現れた。

「そろそろ食事の時ですが」

この頃、食欲がない。

食べないこともしばしばであったので、給仕女は、どうするかお伺いをする。いままでは、一方的に運んできたものが、道真の体の不調がそうさせた。食べたいという気持ちになることは、数えるほどになっていた。体の衰えを感じていた。太宰府に来てから既に二年が経とうとしている。

もう、五十九才である。

（おそらく、もう長くはないだろう）

道真は、今となって思う。

（自分の人生は、一体何だったのだろうか）

この大宰府にきて、大きな不安に捉われている。

流刑と同じような処遇で左遷されたのが悔しいのとは、違う。もっと根源的なものである。たとえ、左遷が無くて栄華の中に包まれていようと、そのように思った

であろうかと感じてしまう。

（今回の事件は、すべて遣唐使のことから始まっている。何故なのだろう。国内が行き詰まると海の外に活路があるような思いになる）

遣唐使の果たす役割が薄れているとは知りながらも、心の奥深くでその可能性に期待をする。ほとんどこの国の人の心の病と言っても仕方がないのではないかと、道真は思う。

人生の末路にあたり、最近、不安が増大している。それは、掴みどころのない得体の知れないものである。ただ、栄華の過去が無のように思われてしようがないのである。

今こそが、本物のように実感するのである。

（終わりになれば、すべてが無である。すべてが、空しくなる）

この思いは、大宰府に来てから、日増しに強くなっていく。

それは、桜がつぼみから徐々に花弁を開いて大きくなっていくようなものである。このことを思う自分を肯定できるのである。

遣唐使派遣が決定されたとき、訪ねてきた私度僧の尋峻（じんしゅん）のことを思い出していた。僧が、語った最後の言葉が今も鮮明に、道真の脳裏に焼き付いている。

「本当に、唐に渡りたかったのだな」

道真の最後の言葉になった。

それは、言葉というより、ほとんどつぶやきであった。その言葉を聞くには、傍に誰も居なかった。既に、連れてきた幼い男の子と女の子は、ろくろく食べ物を摂れずに、そのうち病気になり、あいついで亡くなっていた。誰にも看取られない道真の孤独な死であった。もし、誰かその言葉を聞いたならば、道真自身の本心なのか、誰か他の人物のことなのか、迷うような終わりのつぶやきであった。

それから数年後、尋峻という僧が、唐から帰国した。大宰府に道真を訪ねてきた。道真が、この地で既に卒していることがわかり、落涙した。

尋峻が、道真に何を伝えたかったのか、今となっては誰も知る由もない。

ある私度僧

道真に大使の任命があってから数日後のことである。

その日は、実に夏の暑さが和らいで、道真の屋敷は、秋を感じさせる風がさわやかであった。

「どうか、遣唐使に加えていただきたい」

その僧は、尋峻と名乗った。

最澄が開いた比叡山延暦寺で学び、それに飽き足らず空海の高野山金剛峯寺でも修行した。

「でも書物の中では、どうしてもわからないことがあることに気がつきました」

「書で調べても分からない。それはどういうことか」

僧のその言葉に、何か道真には、心にひっかかるものがあった。

道真自身も、朝廷の叡智として、書物によって知識を吸収して、それを広め、官僚たちの養成や国の統治づくりに役立ててきた。ところが、讃岐の地方官になって、現実を見た時、大きな矛盾を感じた。

重い負担となる税と苛酷な労役に耐えかねて、一家離散、逃亡してしまう民の姿である。

（これでよいのだろうか）

もともと十分に食えるだけの収穫が上がらないのに取り立てる。

ところが一方の富裕な民は、有力なお寺などに、税を免れるために寄進してしまう。

（何とかならないものなのか）

書で習ったものが、現実を豊かにしているとは思えない。

（唐に学んで取り入れてきたものが、これであったのだろうか）

道真自身、心の葛藤を抑えがたかった。

朝廷に長く仕えた今になって、この国のあり方や天皇側近を見ていると、何か胸に蟠（わだかま）るものがあった。

（これでいいものだろうか。いやもっと理想的な政（まつりごと）があるのではないか）

そういう思いが、道真の心を大きく悩ませている。

それと、尋峻が少しばかり自分の素性に触れたが、そのことが微妙に気になった。

「自分は、悪い人間である」

そのため、仏門に帰依しているとも、目を閉じながら喋った。

妻も子も亡くしたと言ったが、それ以上は、視線を何か遠くに置くようで、そのことにはもう触れなかった。道真は、尋峻の様子を見て、それについて敢えて問うのが憚られた。

「仏の教えは、万民を救うことにあると思う。ところが今の僧は、民衆に手を差し伸べない。慈悲の心をどう思っているのか。慈悲の心は、仏の教えの根本にある。道理の前にあるのです。悲は、他の人を思い、慈は、手を差し伸べることです」

道真が、それを聞いて共感するものを覚えたことは、確かである。

「伝教大師最澄や弘法大師空海が、唐に渡りました。そこには唐という国を見たいという強い気持ちがあったのだとおもいます。仏教の経典よりもはるかに唐の土を踏みたかったのだと思います。その踏んだ足の底から伝わってくる実感を持ちたかったのです。唐という大きな広がりを持つ国にどうしても一歩足を踏み入れなければ、すべてが始まらないと思ったのです」

尋峻の言葉に、理屈というより沸き上がる情熱に近いものを感じた。

最後に、尋峻は再度、遣唐使の一行に加えてもらうことを懇願した。

道真は、屋敷の庭に下りた。そこに梅の木がある。今は、神経質そうな枝だけである。これが春になれば、微笑に近いような遠慮深い花を咲かせる。

それを想像しながら、尋峻の言葉を思い返していた。

「唐に渡らなければ、すべては何も始まらない」

尋峻の言葉を何度も繰り返した。

道真も、この年になって、そういう思いが強くなっていることに気が付いている。尋峻は、今の既成の宗教に飽き足らず、新しいものを探し求めている。そういう強い気概があれば、今の比叡山と高野山の二大拠点のほかに、新しい場所を拠り所とする宗教も生まれることも可能だろうと思う。

（それを支援できるかもしれない。今のわが国には、新しい政治とともに、それを

支える新しい宗教も必要な時期かもしれない）

国家のためというより、民衆のための心の支えになる仏の教えを探し求めて、唐に渡りたいということに、どうしても新鮮さを覚えてしまう。

（空海の再来か）

空海が、唐に渡ったとき、私度僧であった。

権力とは離れた所に自分を置いていた。それを思うと、また、尋峻の最後の言葉が思い起こされた。

「唐に渡らなければ、すべては何も始まらない」

道真の本意

宇多天皇は、道真の決意を聞いて、少し驚いた。それが、余りにも本音のように思われたからだ。大納言源能有が、中納言道真を推戴したときに、一体どういうことなのかと訝った。

「もう少し位の低い人物でも、十分ではないか」

と、述べたほどであった。

「それは、寧ろ逆です。実力者を配することによって、この派遣の意気込みを伝えるのです。それと管家は、以前から遣唐使の役目の家柄です」

と、これを能有は、一蹴した。

「いくら強く唐に学ぶものを期待しても、唐からの留学僧の情報によれば、唐は衰勢の中にあり、今、唐に派遣をすることは、危険が多く功を得られるかどうか危ぶまれると聞いている」

道真に、今、朝廷を離れられては、大きな損失になる。

そこまでして、道真を唐になど派遣する意味がない。宇多天皇は、そう考えている。何かの弾みで、これが現実になれば、取り返しのつかないことになる。一度は、道真の大使派遣は認めたものの、これは右大臣藤原良世やそれにこれから摂関家を担う中納言藤原時平も強く推戴したからである。これには、天皇が感じるものがあった。

源能有が、時平に事前にこれを打ち明けた時、即座に賛同の意を表した。それから、大きな高笑いをした。

「道真公が、自らそのようなことを」

そう言って、もう一度大きな声をだして、表情を崩した。能有は、時平が反対しないことは、重々承知していた。時平は、人の話を受け止める時に、高笑いをする癖があった。それは、本人にとって、不都合な話をされるときに、偽態をするものであった。その偽態で、心の衝動を一端、和らげようとするものであった。今回は、その逆であった。時平にとっては、道真が居なくなれば、目の上のたんこぶが除かれる。時平にとって、道真の能力は、疎ましいものである。その見識は、とても時平にとっては太刀打ちできるものではない。家柄だけで、出世していることを非難しているようにも聞こえて、時平は、道真と同席している時に、卑屈にならざるをえなかった。

そういう時平の心情を能有は、痛いほどわかっている。

「何故、この時期になって道真公は、大使に」

時平は、訝った。

「道真公が、望んでいるのですか」

これに、能有は即答せずに、

「道真公は、遣唐使派遣を強く主張されています。適任かと思います」

道真は、この時、既に五十才を越えている。危険と困難を伴う長旅には、不向きな年になっている。

（宇多天皇は、道真を身辺に置いておきたいはずである。でも道真自身、自ら大使を希望することも、無謀である）

時平は、最近、道真の挙動が、何かしら変化していることに気が付いていた。天皇の御下問についても、嘗ての精彩さは見られず、遠慮がちにするようになった。

（すべてが、奇妙である）

時平は、狐につままれるような気分であった。

「お疑いならば、一度確かめてみますか」

能有は、時平を誘った。

貴種藤原時平

「遣唐使の大使だと」

道真にとって、これは寝耳に水であった。

拝命した時に、かなり驚いた様子を隠せなかった。前回の遣唐使が派遣されてから、既に六十年余が経過していた。遣唐使は、先進国の文物を学ぶということのほかに、世界の中心とする中華思想の中国に対する朝貢的意味も日本にはあった。朝貢とは、属国が上の国に挨拶をするということである。

ところが、聖徳太子が、最初、遣唐使の端緒となる隋への使者を遣わした時に、対等の外交を前面に出した。単なる朝貢ではないということを文面にした。これを見た隋の煬帝（ようだい）は、怒り心頭したが、やがて治まった。何故かと言うと、太子は、多勢の留学僧を同伴させたからである。煬帝が、聖徳太子の仏教を学ぶ姿勢を理解したからである。隋の煬帝も、熱心な仏教崇拝者であった。

「日が出ずる国の天子、日が没する国の天子に申す」

聖徳太子の実に工夫された言葉である。

太子が、隋の国を下に見ているのではない。寧ろ、逆である。本当は、逆であるから、そこをなんとかできないかと考えた言葉である。仏教の西方浄土のことを考えれば、隋は、西方浄土で理想の国で学ぶべき国であるということになる。事実、太子は、そう考えていた。

ところが、それ以後、仏教を学ぶ姿勢から、学ぶ者、教える者との優劣が生じた。学ぶ姿勢より、朝貢的意識が、双方に強くなってきた。

「そろそろ唐に使者を出さないと、唐に対して面目が保てない」

という気分が、朝廷内にあった。

道真に遣唐使大使の命が出た寛平六年（八九四年）には、道真の地位は、中納言であった。上には、大納言の源能有（よしあり）、それにもう高齢で名誉的な右大臣藤原良世（よしよ）がいるだけである。ただこの時、権勢門家藤原家の総帥藤原時平は、弱冠二十五歳で

あるが、道真と同じ中納言であった。

「藤原時平でござる」

時平の方から道真にあいさつした。

初めて、権勢門家として揺るぎない地位にある藤原家の時平に面したときは、天皇の御前であった。年長者に対する敬意である。二十歳以上、離れている。

それから数日後、時平とは、御所の廊下ですれ違った。丁度段差があり階段があるところである。そこで、道真は、何かの加減で銅銭を懐から落とした。階段に散らばった。

屈(かが)んで散らばった銅銭を集めようとした時、

「ここから下には、ありません」

と、言って、拾った銅銭を渡す者がいる。

時平であった。上から下りて来たのである。その言葉が、印象的であった。何かしら、気が利きすぎているような言葉に思えた。

（それは、藤原氏という貴種のせいなのか）

この言葉によって、時平という人物、権門勢家藤原氏の存在を感じるようになった。

天皇家以上の権力を持つ。天皇家を支えている。宇多天皇を推戴したのは、時平の父基経である。天皇を決めるのも藤原氏である。これに対して、道真は、そのこと自体に思うところもあったが、それ以上に、何か得体のしれない不気味なものを基経から感じた。それは、年の功からくるものと思っていたが、それと同じものを未だ若干の時平からも感じた。

（これは、どうしたことか）

目に見えない重しのようでもある。

「道真、驚いただろう」

宇多天皇の言葉である。道真は、天皇に呼ばれた。更に、意外なことを述べた。

「お前を唐には、行かせたくない。何とか、別の者にするつもりだ」

これには、道真も驚いた様子だった。

これを聞いた道真の反応は、天皇にとってあまりに意外であった。意外な様子を

していたが、その目はよく見ると冷静であった。
「是非行かせていただきたく」
その言葉に、天皇は、返す言葉もないのか、無言のまま、じっと道真を見続けるだけであった。
この道真と宇多天皇のやり取りを襖越しにじっと聞き耳を立てている者がいる。源能有である。それと能有が連れてきた人物である。
藤原時平である。
（信じられない。道真殿が、唐に渡りたいとは）
自分が人伝てに聞いた話は、本当であると思いながら、時平の驚愕の表情は、変わらなかった。

源　能有（よしあり）

「それだけの才を持ちながら」
道真が、能有に同情を寄せたことがあった。
それを聞くと、能有に過去の辛い悔しい思いが、募ってきた。そのことには、触れられたくない。
「道真公。それは済んだ事でござる。これからのことを考えなければならない」
そう言いながら、能有は、兄であった第一親王惟喬親王のことを思った。
京から北へ離れた大原に隠棲している。そこで失意のうちに亡くなることになる。父、文徳天皇は、惟喬親王を愛した。その才気を愛した。惟喬親王の母を愛した。後継者にしたかった。
ところが、これを時の右大臣藤原良房が、認めなかった。
「こんなことがあるか。天皇が自分で後継を決められないとは」
思わず、声になってしまった。
文徳天皇は嘆いた。それ以上に、大きな衝撃を受けたのは、惟喬親王その人であった。
惟喬親王が、格別に流刑のような処遇になったことを冷ややかな目で見ていたの

が、異母弟の能有である。文徳天皇のあとに即位したのは、清和天皇である。母は、藤原明子（あきらこ）である。右大臣良房の娘である。能有は、清和天皇の兄にあたるが、母の身分が低いために、初めから皇位継承者として考えられていなかった。のちに降籍して臣下となった。源氏を名乗った。

（これでさばさばした）

寧ろ、能有は臣下になったことを歓迎した。

（藤原氏が今もって、力を維持できるのは、外戚だからである。何とかこれを廃さなくてはならない）

そうでないと、自分のような天皇の皇子でも、藤原氏に頭を下げなくてはならない。

天皇家は絶対なはずなのに、藤原氏が権力を握っている。能有は、今が絶好の機会と考えていた。臣籍に降下していた源定省（さだみ）が、本来ならば即位することは考えられない天皇になれたのだ。母は、藤原氏ではない。その宇多天皇は、天皇親政を何よりも望んでおり、できるだけ藤原氏の勢力を弱めようとしている。その気持ちは、能有と通じた。それに、藤原氏に迎合しない政治を推し進めようとする人材を見出すことができた。

道真が見出されたのに、阿衡（あこう）事件なるものがあった。これによって、天皇と能有は、道真を藤原氏との対抗勢力にして、藤原氏の弱体化を狙おうとするものであった。もともと菅原氏は、翰林の家であった。翰林の家とは、儒家の家で学者の家である。官僚の人材育成を行う家柄であった。政治の家では無かった。家柄としても、そういう系統の家が、天皇家の政治の支援を行うことは、宇多天皇にとって、今よりもはるかに理想の政治に思われた。

道真を必要以上に肩入れするようになった。

「外戚の力で、能力はあるのに涙を飲んだ皇子は、過去たくさんおります」

能有が、宇多天皇にそう漏らした時に、

「そなたもそうだが、わたしもそうだ。本来なら、なれるはずもない天皇になった。皮肉にも、基経殿が推戴してくれたのだ。猶子（ゆうし）としてくれた後見人である藤原淑子が、説得してくれたのだ。基経殿の妹にあたる。結局、藤原氏だ」

宇多天皇は、不満を吐露した。西陽が、長く這うように部屋に入ってきている。

その陽が届かないところで、天皇の表情がはっきりしない。声だけが、はっきり

している。

「後継者を、天皇家で決められないのだ。親の意思で、後継ぎを決められないのだ。こんなことは、天皇家だけだ。百性万民誰でも自分の後継ぎは、自分で決められる」

宇多天皇は、本来、即位することができない自分を天皇にしてくれたお礼に、太政大臣藤原基経に対し、

「万機に関わり白(もう)せ」

との詔を下された。その勅の中に、

「阿衡の任を以って卿の任と為すべし」

と、宇多天皇の信頼厚い橘広相(ひろみ)が表記した。

広相の娘は、天皇に入内して、親王を生んでいる。

ところが、基経の方は、これを悪く受け止めた。自分を政治の中枢から外し棚上げにする措置と思って、態度を硬化した。さらに悪いことに、官僚たちは、太政大臣を阿衡の職として、何も実権が無い名誉職だという見解を出した。これに、基経は怒りをぶちまけた。これは、明らかに基経の謀事である。これを理由に、橘広相の罷免を天皇に要求した。ところが、他の官僚たちが、基経の鼻息を伺ってどうしようもない時に、敢然と一人基経に苦言を呈する者があった。

それが、道真であった。普通は、道真まで怒りの対象になって、巻き添えを食うところが、そうはならなかった。基経にとって、若き官僚道真の非難は的を得たものだったのか、その矛を収めてしまった。

（これは、どうなっているのか）

能有も、理解ができなかった。

道真も基経の態度に素直に喜べないものが残った。

「道真の青二才。本音を真向から切り裂いてくる。こんなことで、食ってかかると権勢藤原家に傷が付くと痛いところを付いてくる。今回の魂胆が見破られてしまっている。恥を掻かされた」

基経は、息子の未だ少年の時平を前にして、語りかけるわけでもなく、不満をぶちまけている。

天皇の譲位

阿衡事件から、既に十年の歳月が流れようとしている。それから、遣唐使の発議から、既に数年が経とうとしているが、この結論は未だに留保されたままだ。

天皇は、この頃、何かを思うのか、ふと表情に翳りを見せることがある。

（即位してから、十年か）

今日は、中秋の名月である。

月は、相も変わらずその優美な姿を年ごとに見せている。ところが、それを見る宇多天皇の心は、そのようなものとは違っている。年ごとに、明るさが失われていくような気がしている。天皇は、早くから譲位を口にした。でも、数年前に譲位を口にした時に、能有は、強く反対した。敦仁親王が、余りに若すぎるからである。天皇は、道真にも計ったが、道真も反対せざるをえなかった。どちらも、政治の行く末に不安を感じるものがあったからである。敦仁親王は、藤原氏の母を持つ親王である。

ところが、譲位を強く思い留めさせていた能有が、亡くなった。譲位に、道真は、あくまでも強く反対したが、天皇は、これを契機に譲位を強行した。自分の思いを実現させた。

道真は、身辺に強い不安を覚えた。

（これで、身動きが自由になる。表に出ずに、十分に裁量ができる）

上皇になれば、細々とした儀式等からは、開放される。

上皇は喜んだが、道真は、この時期、能有という大きな壁を失ったことに一抹の不安を覚えた。それと同時に、この年、能有の兄、惟喬親王も失意の隠棲先の大原で、誰にも知られずに亡くなった。

道真にとって、一つの時代の牙城が崩れていくような気がした。

「道真を右大臣にするように」

譲位の時に、藤原時平の左大臣とともに道真の最高位の職を息子の醍醐天皇に進

言した。

これは、宇多上皇の熟慮である。天皇のときに遣唐使派遣を決めて、遣唐使の大使は道真に決めた。ところが、建前は、決定したが、実質は延期している。それと今回は、大使に任命された道真を右大臣の地位に附けた。右大臣の地位で、遣唐使の大使として、唐に渡ることは、とても官僚たちに考えられなかった。

（これで、遣唐使として、道真が行くことはなくなった）

朝廷の誰もが、そう思った。

実質、この時に遣唐使は無くなった。宇多上皇は、唐の手前、道真の大使の任を解いてはいないが、自分の政治を強調するために決定したことを決定を取り下げるのではなくて、政治的に無意味なものにして帳消しにした。

（これでよいのだろうか。祖家は、儒家である。それが政治の頂点にいては）

妙な噂も聞いた。それは、

「菅公が、右大臣にしてもらったのは、唐に渡るのを何としても阻止したいからである。帰れないかもしれない遣唐使を何とか免れたいためである」

何と卑怯な、憶病などと朝廷の官僚たちは、そういう非難をした。

道真は、過去の遣唐使の状況を財政上の問題も含めて調査報告していることに加え、現在の唐の政治状況も報告している。唐に長期に滞在している留学僧がもたらしている唐の凋落ぶりから、遣唐使派遣の危惧に答えたものである。道真の報告も、唐の状況を今少し、眺めておいた方が良いというものであった。それは、公務上の役目として上奏したもので、私情をさしはさまないことに徹した内容であった。それも、非難の対象になった。

自分が行きたくないために、派遣を取りやめることを進言したと噂された。

（宇多天皇にも、本心はわかってもらえない）

道真自身の本心は、誰にも理解されないことを歯がゆくもあり、また、露骨に主張することも憚られた。公式的な報告を終えた後に、

（それでも唐に渡らなければならない人物はいるのだ。唐に渡らなければ、すべては始まらない）

と、心の中で訴えていた。それは、自分に言い聞かせているようでもあった。

「遣唐使は、もう派遣されないのですか」
時平が、宇多天皇に確認したことがある。
「派遣を止めるわけではない。時期を見張らかっている」
時平は、道真が唐に早く渡ることを期待している。ところが、遣唐大使のままで、右大臣に登り詰めてしまった。
（まさか、上皇に計られたのでは。道真は、あれほど行きたいと確か奏上したのではなかったか）
そう思うと同時に、逆に、藤原系ではない宇多天皇が、譲位したことに何か安堵を覚えるものがあった。時平は、何とかこの事態を打開したいと考えている。

されど遣唐使

この時期、宇多天皇には、道真の娘が嫁いでいる斉世（ときよ）親王がいたが、この親王に譲位することは、余りにも露骨であり、そういうことが許されるものではなかった。第一親王である藤原系の敦仁親王に譲位した。
「あくまでも、第一親王です」
この譲位の年に亡くなった源能有の言葉である。これには、能有の複雑な心境が表れている。同じくこの年に亡くなった兄の惟喬親王のことを思っての言葉である。惟喬親王は、第一親王であったが、その当時の右大臣藤原良房の前に、天皇に即位できなかった。その無念の思いを傍にいた能有は、知っている。
惟喬親王だけではなくて、父の文徳天皇の嘆きも感じていた。
（藤原家とは、一体どういうことなのか。天皇の上に君臨している）
その時に、能有の心には、怒りというよりも、暗い闇のような疑念が生じた。これが、道真に投影されている。
道真は、うつらうつらしている。書を根気よく読んで、少し眠気に襲われた。眠気から覚めると、この書の中に書かれている紀三津のことが気になった。前回の承和の遣唐使派遣の際に、事前に新羅に派遣されたものである。もし、遣唐使が風浪

のため新羅に漂着したら、救助をお願いするとの使いであり、一つの礼儀であった。ところが、新羅は、素直にこれを認めなかった。紀三津を遣新羅使と認めなかったのである。

（何故、このようなことになったのだろうか）

新羅は、故意に日本との交流を棄てようとしている。

その傾向は、更に強くなっている。紀三津のその後のことも調べさせたが、すでに亡くなっていた。帰国後、使命を果たせなかったので処罰を受けて、失意の中で、亡くなった。

「新羅は、我が国が百済の人によって創られた国だと思っている。新羅が滅ぼした百済である」

紀三津が、失意の中で何度も家族に漏らした言葉である。

道真は、今、六十年前の前回の承和の遣唐使について、何か喉に刺が刺さっているように、飲み込めないものが残った。二回も渡海に失敗している。その間、副使の小野篁が、任務を放棄している。逃亡者も出ている。それと、更にその前の延暦の遣唐使では、結局大使は、病気のために渡海せずに、副使が代理となったが、結局、帰国の際に海の藻屑と消えた。

（遣唐使には、大きな志とともに、死を恐れない覚悟が必要である）

道真には、今、それがある。

でも、続日本後紀を読んで、もっと大きなところで、心の中に、暗雲が見る見るうちに大きくなっていくことを感じた。でも、その中で、大きな方向が見えて、その方向に舵を取らなければならないという覚悟もできてきた。

前回の承和の遣唐使のことを調べれば調べるほど、道真は、複雑な気持ちになった。

（唐への義理立てしかない）

遣唐使派遣の効果は、当初遣隋使から始まって、藤原京、平城京の奈良時代の律令国家の建設に制度の導入と国家鎮護のための仏教導入のために大きなものがあった。でも、今は、商人や私度僧などが自由に唐や新羅に渡られるようになっている。大陸から頻繁に商人の交流が盛んになって、船の航行も安全になっている。ところが遣唐使という国家的事業で航行する場合、多人数となり、大きな船が必要となっ

ている。

（大きな船は、波浪などの影響が大きくなる）

この当時の大きな船は、荒波に脆くなる。大きな船になればなるほど安全度が下がってくるのである。それまでして、今、国家が唐から学ぶことはない。今は、唐から学んだ制度の運用を適正にしていくことに、心を砕かなければならない。国内での改革に専心することが肝要ではないか。

それと前回の派遣が、二回の渡航失敗にも拘わらず、強行されたことに道真は疑念をもった。

（天皇の意思だろうか）

遣唐使が派遣されれば、莫大な費用が掛かる。増して、前回は、再三の船の修理などその費用は、民の過酷な税と労役がなければ、実行できないものである。副使小野篁は、最後の出発のときに、乗船を拒否した。

（大使藤原常嗣との確執というが、そうであろうか）

道真は、ある顔を思い浮かべた。

「この度は、大使の御役目、誠にご苦労さまでございます」

その顔は、口元にいくらかの笑みがあった。時平は、なおも続けた。

「自ら名乗りを上げたこと、なかなかできることではない。やはり、道真殿は、天皇が信頼するだけの器量です」

この時、前回の遣唐使派遣の時代は、時平の祖父良房が台頭したことを直感的に覚えた。

道真は、天台請益僧円仁の書いた「入唐求法巡行記」を読んでいた。円仁が、承和の遣唐使に加わったさいに、克明に書いた滞在日記である。請益僧とは、留学僧とは違って、短期の滞在を目的としたものである。

（円仁ぐらいか、自分の目的を果たしたのは）

円仁が、唐に渡り、そして帰国できたのは、ほとんど奇跡に近い。

遣唐使の一行とはいっしょに帰国せずに、請益僧とは言いながら、唐に結局十年近く滞在して自分の思いを果たした。そして、帰国したい時には、それを許されないところであったが、天は味方した。時の皇帝が仏教を排斥した。政治状況の変化の中で、奇跡的にも国外に出ることができたという運命であった。道真は、円仁の巡行記の中に、遣唐大使の藤原常嗣や副使の小野篁についての何か客観的な記録が

ないかを探した。それと、この時の遣唐使に対する円仁の主観的な評価も無いかどうか時間を掛けて詳しく読んだが、唐における自分の巡行を克明に述べているだけで、道真が期待する政治的な記録は何もなかった。ただ、大使常嗣の円仁に対する求法の許可について、大変熱心な行動が記されている。その熱心さは、異常と言ってもよいほどである。それが、大使のすべての使命であるかのようであった。唯一の使命であるかのような印象を受けた。

道真の心に何か腑に落ちないものがあった。今回の派遣決定の折には、比叡山や高野山からの宗教的立場からの強い働き掛けは、何もない。

（円仁は、師の最澄、そして空海への思いが強く、唐に渡ることは寧ろ自分が働きかけるほどの熱意であったのか）

円仁に話も聞きたかったが、すでに三十年ほど前に亡くなっている。二百名以上の犠牲者が出ている前回の遣唐使に、何の意味があったのだろうか。

（やたら惜しい人材が、海の藻屑に消えただけではないか）

大使常嗣も帰国後、一年も経たずして亡くなっている。四十五歳である。

（過酷な任務を果たし、気が落ちたのか）

唐に渡ることを拒否した篁は、その後許されて、参議にまで登っている。何か釈然としないものがあった。朝廷側で、何か過酷な運命を強いるこの遣唐使派遣に後ろめたいものがあったのであろうか。そんな疑念が、どうしても道真の心に湧きあがってくる。

そういう気持ちは、円仁の「入唐求法巡行記」を読めば読むほど、湧き上ってくる。それと、読めば読むほど気になる記録がある。下痢を起こす者が多いのである。たくさんの者がそうだから、個人に問題があるわけではない。水が悪いのである。これは、唐からの商人たちからも聞いていたことである。

（文明が発達するところは、苛酷な自然があるのではないか）

そう思うと、道真は、ある人物を心配した。

（そういえば、尋峻は、もう唐に渡ったのであろうか。あれから尋ねてこない。朝廷を当てにしていないのだ）

尋峻の最後の言葉を思い出していた。

「唐に渡らなければ、すべては何も始まらない」

円仁もこういう衝動に駆られたに違いないと思いながら、読み疲れた眠い目をこ

すった。

道真の上奏

「何、道真が、遣唐使派遣に異議を申したと」

いつも笑みを携えている時平の目は、表情を失った。

あれほど、自ら、遣唐使をのぞんでいたはずの道真が、急遽態度を変えて、宇多天皇にそのようなことを上奏したことが、信じられなかった。道真が、唐に渡ることになれば、かなりの危険が伴う。時平が手を下さなくとも、道真はこの世から消えるかもしれない。それでなくとも、長期の派遣の間、朝廷を不在とするので、時平は自分の体制を固められる。道真に邪魔されずに、自分の思いとおり事を運べる。

時平は、早速、天皇に会った。

「何でも、道真殿が、遣唐使の廃止を訴えられたとお聞きしましたが、それはなりませぬ。道真殿ともあろうお方が、自分の保身のために、国家の使命を投げだされるとは」

そう一気にまくしあげた後、時平は、高笑いした。

それに対して、宇多天皇の表情が冴えない。無言のままである。何かを言いたそうであったが、その言葉を飲み込んだ。

それを見て、時平は、畳みかけた。

「派遣中止は、天皇の権威に泥を塗ります。この際、即刻、派遣の儀式を執り行うべきです」

「……」

天皇は、苦渋の表情のままである。

時平は、勝ち誇ったように、満足な笑みを零して、清涼殿を引き下った。

その後ろ姿を見ながら、宇多天皇は、どうしても藤原氏のことを思わざるを得ない。時平は、藤原氏を背負っている。この藤原氏の過去の威勢でもって、威圧している。

天皇には、自分の上に垂れ込めるような厚い暗雲でしかない。

（脅しのつもりか）

どうしても、素直に、時平の言を受け入れられない。

その上奏を受け入れれば、藤原氏に屈伏させられたことになる。それはどうしても避けたい。藤原氏が天皇の上にあることを認めることになる。時平の祖父である藤原良房のことを思い出していた。その時代に、前回の承和の遣唐使派遣があった。二回の渡航の失敗にも拘わらず、強行された。

今の時平の余韻を感じながら、その余韻の中に、良房が浮かんだ。

（あのときに、強行したのも良房の意見であったとしか考えられない）

それは、道真から聞いたことである。

道真は、承和の遣唐使の状況を詳しく宇多天皇に説明した。

二度の渡航の失敗にも拘わらず、天皇があくまでも強行せざるを得なかった理由を詳しく説明した。

宇多天皇は、先ほど言いたいことだけ言って引き下った時平の背中に、良房のことを思い浮かべながら立ち上がった。その時に、ふと不安が過ぎって、眩暈がした。良房の時代には、伴健岑（ともの こわみね）と橘逸勢（たちばなの はやなり）の追い落としがあった。藤原氏の行く手を阻むものは、容赦しない。それが、中臣鎌足から連綿と伝わる藤原氏の遺伝子とも云うものである。

それから、道真のことが瞼に浮かんだ。それと同時に、天皇の足が前に進まなくなった。

密　約

宇多上皇は、道真の大宰府の境遇を伝え聞いていた。

（まさか、こうなるとは）

自分が上皇になって、院政を早めに布いて、藤原氏を牽制する。

そうすれば、良房の時に起こったような政変は阻止できるだろうと考えた。息子の醍醐天皇には、特に人事のことは、大事であるからくれぐれも相談するように、言い聞かせている。ところが、今回の道真の人事のことは、寝耳に水である。

醍醐天皇は、すでに時平のことをいうことを信じて疑わないし、もうその勢いに逆らうことはできない状況になっている。

（醍醐天皇は、天皇家ではなく、藤原氏の一族なのだ）

宇多上皇は、これに気が付いて、虚脱感を覚えた。

何とか、そういう状況だけは避けようとして、道真を右大臣にした。

「折角のことながら、恐れおおくて、これを拝命することができません」

道真は、こう申し出た時に、宇多上皇は、これを、慣例上のことだと思った。

一度ならず、再三再四、道真の上奏が行われた。それも、周囲に妬みに対するひとつの処方だと考えていた。一度、出された辞令は、よほどのことが無い限り、撤回されることがない。そうしないと、人事に対する不満は、切りがないのである。道真の場合は、好遇に対する辞退の意思であるが、誰もがこれを慣例上のことだと疑わなかった。寧ろ、逆に、何度も繰り返すので、右大臣という地位を誇っているかのような印象を与えた。他の官僚たちは、顔をしかめる始末である。道真は、迷っていたが、辞退は本気であった。宇多上皇の意思を受けて、時平と対抗するにも、敵が多くなってくる。律令制度の改革自体が、それでは円滑に行かない。それが大きいと考えている。

例え、地位が高くても、それでは、梯子を外される。

（どうも坐りが、悪い）

道真のところにくる官僚たちが、少なくなってきた。そのうちに、嫌な噂を耳にした。

それは、息子の高視（たかみ）が伝えたものである。

「父上、朝廷では、唐への大使も拒否して、右大臣になられた。これでは、教育を司る菅原家の立場が危うくなります」

息子は、大学頭である。立場上、辛いものがあるようであった。

「やはりそうか」

ぽつりと道真は、つぶやいた。それから、目を高視から逸らした。

立ち上がり、庭の見える縁にまで足を運んだ。庭には、花のない梅の木がある。その木に、花を思い浮かべることが好きである。そして、梅の香りが、今にも風に運ばれて飛んできそうな気がした。

「遣唐使のことは、何とか誤解のないように、決着を付けなければならない」

それは高視に語りかけるのでなくて、独り言のようであった。

それから間もなくして、大宰府大弐の沙汰が下った。全く一方的な措置であった。流刑ではない。一つの人事であった。

左遷であるが、それをはるかに越えたほとんど流刑に近いものであった。

（やはり遣唐使のことか）

ほとんど直感的にそう思った。

今回の流刑に近い措置は、道真に、宇多上皇を凋落して、醍醐天皇を廃し、自分の女婿である斉世（ときよ）親王を天皇にする企てがあったとするものである。

それを耳にして、道真は、庭の梅の木を眺めながら、思わず嘆息した。

（否、そうではない。根は、遣唐使の派遣中止のことなのだ）

人間の心に渦巻く闇の深さに打ちのめされるような感じがした。

遣唐使派遣のことで、道真は、昔を思い出していた。右大臣源能有が存命の時である。宇多天皇と能有に道真が呼ばれた。

「遣唐使派遣を決定する」

道真が、最初に能有からそれを聞いた。

「ここからが、大事なことだ。この三者以外に知られてはいけないことだ」

能有の言葉に、宇多天皇は、黙ったままだ。

大使には、道真を任命することも言われた。

道真にとって、余りに唐突なので、何が何だか分からない。戸惑うだけである。遣唐使派遣は、前回からすでに六十年近くが経過している。実質的には、廃止されているようなものである。誰もが、もう遣唐使は、終わっっていると感じていた。道真自身、遣唐使のことを考えたこともあるが、前回のことを調べれば調べるほど、それが膨大な費用の割には、何をもたらしたのか疑問を抱いていた。そうまでして、何故、実行されたのか。調べると、ある人物が、出てきた。そのことは、この時まで道真自身の心に納めたままだ。道真にとって、遣唐使の派遣は、今の時代には、あり得ないことであるとひ常々思っていた。阿衡事件の時に、鋭く藤原基経に噛みついたのも、潜在的にそのことが心にあったからである。

（藤原氏の思いとおりには、絶対にさせない）

前回の遣唐使の時は、基経の父良房の時代であった。
「この決定で、時平は満足するだろう」
能有の自信に満ちた言葉である。
時平は、自分の時代に遣唐使派遣を自分の発案で決定したい。それは、祖父良房のことを意識している。これによって、藤原家の中でも、自分の正統性を保ちたいのだ。
「それに、この決定で唐にも顔が立つ」
能有は、自信に溢れた気持ちである。
「でも、決定されれば、いずれ実行しなくてはならないのでは」
道真の問いに、能有も宇多天皇も体を乗り出すように、同じ言葉が飛び出した。
「そこが、問題だ」
それから、お互いが顔を見合せて、そのあとは、能有が続けた。
「留学僧からの伝えによれば、今、我が朝廷がもう六十年近く朝貢をしていないことを唐が咎めるなどということはないそうである。咎め立てして、軍を興し、我が国を攻めるなど、考えられない」
これには、道真も、そのようなことを考えていた。反抗しているわけではない我が国を攻めるなど、中華を誇る大国の唐は、到底考えもしないことだと思う。すでに我が国に対しては、属国意識でいる。それと、唐では、朝貢してきた国には、それなりの褒美を与えなければならない。それも大変である。海に隔てられた遠い東の果てにある日本のことを考えることなど、とても此方が心配するほど何もない。
そこで、宇多天皇が、話に割って入るように、問いただした。
「ところで、道真。今、唐に学ばなければならないことはあるか。遣唐使の派遣の実益はあるのか」
これに対しては、道真も既に長く考えていた。
前回の承和の遣唐使のことをじっくり道真なりに、費用対効果を計算していた。前回の遣唐使派遣について、宇多天皇に兼ねて考えていたことを説明した。最後に、道真が、残した言葉に、宇多天皇は感じ入るものがあった。
「これからは、唐の悪いことしか、学ばないでしょう。唐の模倣は、唐には優れないことです。唐を越えられず、二流国でしかない。これからは、日本が唐の制度を越えるべきことを目標にすべきです」

道真は、最後にこれを述べて、この朝貢を始めた人物のことを考えた。
聖徳太子である。
「遣隋使として聖徳太子が始めてから、既に三百年が経過しようとして。その間、既に十回以上の派遣を行いました。膨大な税金と多大な犠牲を払って、隋、唐の国から学びました。太子は、国を治める基本を仏教としたのです。その仏教の教理を学ぼうとしたのです。今日本は、その仏教の鎮護国家として、唐よりも仏教を大切にしています。その間、律令制度も学びました。でも、これらを運用するのは、すべて時の為政者です」
「為政者次第というのか」
「すべてがそうです。正しく他者のために、弱者のために運用されていなければ、どんな精巧な制度でも権力者に利用されてしまいます。そうならないために、聖徳太子は、この制度を始めたのです」
「その役目は終わったと云うのか」
「そうとは、申し上げておりません。よいものがあれば、これからも学べばよいが、今、唐に多大な犠牲を払ってまで、学ぶべきものがおそらくないというのが現実です」
宇多天皇は、源能有のほうを見た。
「道真殿。我々もそのように考えていたところです」
そこで、能有は、意外なことを道真に打ち分けた。
今後の方策である。それを聞きながら、藤原時平のことが思い浮かばれた。
「道真。そなたが恨まれるかも知れないが、どうか」
その天皇の言葉に、道真は、この場合、ただただ深く頭を下げざるを得なかった。
頭を下げながらも、自分の本心に気が付いていた。
（唐に渡らなければ、すべては何も始まらない）
頭を垂れながら、道真は、何度も何度もこの言葉を繰り返していた。

第10回文芸思潮銀華文学賞 歴史小説賞佳作受賞作品